

ヤンゴン素描 40

ピー・ラーン 建国三王の像

山形洋一

三次にわたる「ビルマ帝国」建国者の個性的な銅像は、王者が堅持すべき宗教、軍事、政治の理想を示す造形として、眺めていて飽きないものがある。

切り通しの上に百貨店トーウィンセンターの紫壁が見える位置に、ピー通り駅がある。ピーは旧名 Prome、ヤンゴン川中流左（東）岸の町で、ピー街道は英領時代からヤンゴンの北へ向かう主要街道だった。今では国道 1 号線につながっている。

駅の角にあるバス停は、かつての「ペゲー・クラブ」がビルマ語風に訛って「ペゲー・カラッ」と呼ばれている。「ペゲー」は「バゴ」のことで、中国語の音訳はちょっと思わせぶりな「勃固」。「勃固倶楽部」などと書くと、怪しげな小説かビデオのタイトルかと勘違いされるかもしれない。

かつての「ペゲー管区」は現在の西バゴ管区だけでなく、現ヤンゴン管区も占めていた。首都ヤンゴン（旧ランゲーン）に「ペゲー・クラブ」があるのは、たとえば東京に「武蔵クラブ」があるような関係になる。

クラブ創設は 1871 年だが、ピー街道沿いの建物ができたのは 1882 年だ。当時の施設としてカード（トランプ）室、図書閲覧室、玉突き室（玉突き台が 4 卓）、テニスコート 1 面があった。1900 年の記録では会員 350 人、クラブの収容人数は 25 人となっている。

会員資格は漠然と「社会に関心のある紳士」と謳われていたが、現実には政府の役人と専門技術職に限られていた（1900 年時点）。人種的には欧州人限定で、ユーラシア人（ヨーロッパ人とアジア人の混血）は排除された。少数の植民者だけで大勢の「現地人」を統治するには、こうした権威の誇示が必須だった。

だが帝国支配も後半になると、さまざまな綻びが見えてくる。それを敏感に感じた一人に、地方の警察官をしていた、後の作家ジョージ・オーウェル（1903 - 1950）がいた。彼の小説『ビルマの日々』では、地方の白人クラブにも非白人会員を一人入れることになったが、その荣誉ある第一号会員枠をめぐる、純情なインド人医師と、狡猾で残忍なビルマ人司法官

が戦い、巻き込まれた白人主人公が自殺に追い込まれる。周辺の白人たちが時代の矛盾に苛立ち、逆光するグロテスクな姿が一つの読ませどころで、英国での出版が遅れたのも理解できる。

旧ペギー・クラブの建物は、現在警官の宿舎になっているそうだが、歴史遺産として見直され、いずれは高級ホテルかレストランにでも生まれ変わるかもしれない。クラブの正面にあった赤レンガの洋館作りの旧外務省は、模様替えをしてデパートとなった。

駅前の角から街道沿いに北に数百メートル進むと国立博物館があるが、見るべきものがほとんど何もないのに、外国人入場料が5ドルもする。そんな暇があったら、前庭に立つ3人の王のブロンズ像をじっくりただで見るとよい。その風貌は彫刻家ウ・ハン・タン (U Han Tan 1926-2000) が、伝承や事跡をもとに再現したものだが、それぞれ個性的に表現され、

ミャンマーの現代彫刻の中でも優れた作品群だと思われる。



アノーヤター王 (在位 1044-77 年) は、バガン王朝 (第一ビルマ帝国) の創始者で、バガン寺院群の建設に着手した。密教色が強く腐敗していた大乘仏教を肅清して、上座部仏教を保護して統治の仕組みを作った。トーガのような布を左の肩でとめ、視線を高く保つ賢者の面立ち。左手には経典一式を持つ。王冠を飾る鱗のような装飾は、伝説のメルー山 (須弥山) を主峰とするヒマラヤ山脈を示すのだろう。護法王の高潔さを偲ばせる造形だが、その経典を強奪され、僧侶を強制連行されたモン族にとっては、文明破壊者だ。英領時代には Dalhousy 総督の名で呼ばれていた下町の目抜き通りに、彼の名が冠されている。

パインナウン王（在位 1551-81 年）はバガン王朝がモンゴル軍に滅ぼされたあとの混乱を鎮め、中部乾燥地帯の覇者としてタウンゲー王朝（第二ビルマ帝国）を興した。彼の像は後ろに重心をかけ、腕組みをして前を睨み付ける精悍な姿で、その装束も含めて「王様と私」でユル・ブリナーが演じたシャム国王を思わせる。現在のタイ、ラオスにまで及んだ彼の膨張政策が、帝国の崩壊を早めた点では、豊臣秀吉に似ているかもしれない。彼の名はヤンゴン東北部の道路と橋につけられている。



コンバウン朝（第三ビルマ帝国）の基礎を作ったアラウンパヤー王（在位 1752-60 年）の風貌は複雑だ。細身で一見柔和な姿は、武人と言うよりは老練な政治家のように見える。王者の象徴である菱形の短剣を右手に持ち、その切っ先を左手でいじりながら、次はどこをどう攻めようかと思索しているように見える。外交と戦争をたくみに組み合わせる食わせ者。ときにはユーモアで人をたぶらかす術も知っていたのだろう。太陽の位置が変わると、彼の表情も微妙に変化する。肖像美術として見飽きない。不思議なことに、ヤンゴンの名付け親である彼の自身の名を、この町の目抜き通りに見ることができない。

三人の王は侵略者（モンゴル）や隣国（シャム）とも戦ったが、それ以上多くの労力を「国内」の異民族制圧に向けた。その事績を日本の歴史になぞらえるなら、大和朝廷の基礎を作ったといわれる日本武尊や神武天皇あたりに相当するかもしれない。これら三像の背後には、日本で言えば、隼人、熊襲、国栖、土蜘蛛といった「まつろわぬ」民らが、いまだに盤踞しているのだ。（了）